

五 川ノ上古墳群

徳永川ノ上遺跡は、旧石器時代から中世に及ぶ複合遺跡であり、墓地も弥生時代後期から古墳時代初頭の時期と、古墳時代中期から終末期の時期が確認されている。なお、古墳時代後期から終末期の集落は、約二〇〇メートル東方の源左エ門屋敷遺跡で、六世紀後半から七世紀初頭の竪穴住居跡一軒が調査されている。

遺跡の概要

古墳時代中期から終末期にかけての古墳群は当遺跡の中央部から南部に位置する。遺構は方墳四基と円墳一八基、小石室四基が検出されている。

四基の方墳のうち3号墳は一辺が一二メートルで、主体部は破壊されていたが、周溝から仿製鏡一面、勾玉四点・小玉約四五〇点、竪櫛六点のほかに鉄製鋤先・刀子などが出土しており、五世紀初頭と考えられている。一八基の円墳は、河原石積みの横穴式石室であるが、後世の開墾でほとんど破壊され、石室は腰石部のみを残すものが多数である。しかし、床面から出土した遺物は豊富で、須恵器・土師器のほかに、鉄刀・鉄鏃、馬具、鉈、金環・銀環、勾玉・切子玉・丸玉・小玉などがある。これらの円墳の内部主体は祓川の河原石で構築した横穴式石室で、石室の形態は正方形、略正方形、縦長方形、T字形の四タイプがあり、羨道の形態せんだうも両袖、片袖、無袖の三タイプがある。造墓活動は六世紀後半から八世紀前半にかけてである。

六 鋤き先遺跡

当遺跡は、川ノ上遺跡の北方に連続する遺跡で、川ノ上遺跡同様に国道一〇号バイパス工事に先立ち発掘

調査された。調査地域は祓川の右岸段丘直上にあり、調査面積は約五七〇〇平方メートルである。

調査以前には、当該地は宅地や畑地となっており、北部には浄土宗の成就山果願寺があった。

### 調査の内容

当遺跡は旧石器時代から現代に至るまでの複合遺跡であるが、古墳時代の遺構は前期初頭ごろの方形竪穴住居跡三軒と古墳七基（第3表）・横穴墓四基などがある。遺構は全体的に上部の削平が著しく、古墳の墳丘盛り土はほとんど残存しておらず、周溝のみ検出されたものもある。

3区2号墳は調査で周溝の一部と、石室の下部が検出され、周溝の規模が六メートル程度に復原される小古墳である。石室（第24図）は単室の横穴式石室で、玄室は長さ一・七四メートル、幅〇・八五メートルの縦長の長方形をなし、床面には扁平な礫と小礫を敷き詰めている。玄室の奥壁と側壁には長さ六〇センチメートル前後の腰石を置いている。玄室と羨道の境の床面には框石を置く。羨道は長さ一・二二メートルが残存し、幅は奥で〇・八二メートルである。0区1号横穴墓は祓川の段丘斜面に掘削した横穴墓で、全長三・四メートル。玄室は長さ一・七メートル、幅一・七メートルで、床面は隅丸方形をなし、円礫が敷き詰められ、中央に排水溝を持つ。玄室からは成人男性の人骨が検出された。

住居跡は三軒とも方形をなし、2区1号住居跡がベッド状遺構を持ち、床面が幅二・五メートル、同2号住居跡がほぼ正方形で三・五×三・四メートル、3区1号住居跡が床面幅三メートルと、すべて小型の竪穴住居跡である。

### 遺跡の性格

当遺跡の古墳時代の墓地は、北部に横穴墓群が分布し、約一二〇メートルの間隔をおいて南部に古墳群が営まれている。墓地の時期は、ともに六世紀後半から七世紀前半である。横穴墓群は居屋敷横穴墓群の南部の支群にあたり、当古墳群の南方約二〇〇メートルの地域には川ノ上遺跡の古墳群が分

第3表 鋤先遺跡古墳一覧表

(単位：メートル)

遺構 番号	遺物	形態	径	高さ	周溝 長さ	有無	玄室	幅	長さ	深さ	径	高さ	時期	玄門	幅	高さ	前室	長さ	幅	
																				構造
1号墳	墳丘	橢円形	不明	不明	周溝	有	0.8~1.0	0.2	8				時期						石室の有無	無
	遺物	須恵器(蓋1・杯身4・杯蓋3・甕1)、鉄1、馬具6、刀子2											備考						石室の有無	無
2号墳	墳丘	不明	不明	不明	周溝	有	0.5~0.8	0.1	[6]				時期		6世紀後半				石室の有無	有
	石室	不明	不明	不明	周溝	有	0.5~0.8	0.1	[6]				備考	玄門	0.82	(0.26)	前室		石室の有無	—
3号墳	墳丘	須恵器(杯身1・杯蓋1)、ガラス小玉6					1.74	0.85	(0.30)				時期		不明				石室の有無	無
	遺物	須恵器(杯身1・杯蓋1)、ガラス小玉6											備考						石室の有無	無
4号墳	墳丘	無					0.4~0.7	0.06	5				時期		不明				石室の有無	無
	遺物	無											備考						石室の有無	無
5号墳	墳丘	円形	不明	不明	周溝	有	0.7~0.9	0.15	6				時期		不明				石室の有無	無
	遺物	橢円形	不明	不明	周溝	有	0.3~0.7	0.2	4.5				備考			6世紀後半			石室の有無	無
6号墳	墳丘	須恵器(高杯1)											時期		不明				内部主体	小石棺
	遺物	須恵器(高杯1)											備考						内部主体	小石棺
7号墳	墳丘	円形?	不明	不明	周溝	有	0.3~0.5	0.12	3.3				時期		不明				石室の有無	有
	石室	橢円形	不明	0.24	周溝	有	0.2~0.8	0.3	5.5				時期		不明				石室の有無	有
	遺物	単室横穴式石室	(2.1)	玄室	1.00	0.50	(0.51)						備考	玄門	0.48	(0.31)	前室		石室の有無	—
		鉄1																	石室の有無	—

## 第4章 古墳時代

布している。この徳永地区の居屋敷遺跡から川ノ上遺跡にかけての祓川右岸段丘沿いは、約1キロメートルにわたる古墳時代後期から終末期にかけての大規模な墓地としてとらえられる。そのなかで、古墳群と横穴墓群とが地域を分けて営まれていることは、それぞれを築造した集団が異なるものか、同一集団内での格差を示すものか、いずれにしても興味深い現象である。